

〔共同研究〕

“The Edinburgh Review” 1802-1884 の Contents Analysis (I)

報告者 天羽康夫・後藤邦夫

1. 序論——*The Edinburgh Review* の重要性と本研究の意味

われわれの研究の目的は、桃山学院大学図書館所蔵の著名な評論誌、*The Edinburgh Review* (1802-1884, 1885-1929は欠号)の全目次を、いわゆる情報検索の初等的な手法によって処理し、その結果を用いて内容に関する一定の研究をおこない、さらに他のより広汎な研究に役立てる、ということである。したがって、この研究の内容には次の三通りのものがふくまれていることになる。

- (1) 評論誌 *The Edinburgh Review* そのものに関する研究。
- (2) *The Fdinburgh Review* にとりあげられた著書およびその論評を通じての、19世紀英国の政治・経済、学術、思想、文化、芸術をめぐる研究
- (3) 比較的小規模で簡便な、情報検索・ドキュメンテーションの手法の実行とその検討、ルーチンとしての確立。

これらの研究のための作業は、いずれも相当のルーチン・ワークをとまなう長期にわたるものである。本報告では、その第I部として、研究の意義の明示、手順の確立、結果についての一定の見とおしと事前評価、などが扱われる。それに先立ち、*The Edinburgh Review* について、これまでに知られていることを、われわれの研究に必要な程度において与えておくことにする。

われわれの取扱いの対象である1802年創刊の*E.R.**に先立ち、1755年創刊の、いわば、第一次*E.R.***ともいふべきものが存在したことはよく知

* *The Edinburgh Review* を以下このように略記。

**この節にかぎり、第一次、第二次という呼称を用いるが、一般には*E. R.* はすべて1802年創刊の方をさすので他では用いない。

られている。ただし、この雑誌は、2号を出したのみで、その急進的傾向のために廃刊された。第一次*E. R.* と第二次*E. R.* との間の時間的へだたりを考え、また、後に「ジャコパンの傾向」と評された前者と、リベラルなWhigの立場にたっていた後者のちがいを考えると、両者間の直接的な結びつきを見出すことは困難であろう。しかしながら、雑誌の体裁、形式、高度の独立性、さらに、多かれ少なかれ、Scotch Enlightenmentの思想的影響下にあったこと、等によって、第2次*E. R.* の刊行が、第1次*E. R.* によって大きく影響されたと考えるのが自然であろう。

さて、第一次*E. R.* は、1816年に、J. Mackintoshの序文を付して復刻され、さらにそれが1975年3月、水田洋教授の解題とともにわが国で復刻されている。¹⁾

それらにもとずき、われわれは、第一次*E. R.* について、一応のイメージをもつことができるようになった。創刊の中心となり編集に従事したのは、後にLord Chancellorにまで出世する法律家Alexander Wedderburnである。1750年代のEdinburghやGlasgowは、化学者にして医者のWilliam Cullen, Joseph Black, 地質学者James Hutton, 哲学者David Hume, さらにAdam Ferguson, Adam Smithといった人びとが、相互に親密な交友関係を結びつつ活躍していた時期である。1754年に、SmithやHumeと同じクラブに加入を許されていたWedderburnが第一次*E. R.* の編集をはじめたのは、22才のときであった。僅か2号で終わったこの雑誌が研究者の注目を集めてきたのは、その中で、Adam Smithが、有名なDr. Johnsonの辞典に関するReviewを執筆していたからであるが、他に、*History of Scotland 1542-1603*の著者で後の

Edinburgh 大学長 William Robertson, 長老派の牧師でやはり Edinburgh の修辞学教授となる Hugh Blair, 同じく Edinburgh の非国教会牧師 James Jardine, 外科医で後に Edinburgh 大学自然哲学教授となる James Russel が寄稿しており、いわゆるスコットランド文芸復興運動の基礎資料としての価値が認められているのである。

ところで、さきにのべたように、彼らスコットランドの科学者、思想家の間の個人的関係はきわめて緊密であった。²⁾

Black, Russel, Ferguson は、母方を通じての従兄弟同士であり、Ferguson の妻は Black の姪であり、Hume, Smith, Black, Hutton の4人は Oyster Club というきわめて親密なグループをつくっていた。Hume の大学図書館司書の職をついだ Ferguson は自然哲学教授に移り、やがて道徳哲学教授に移ったあとを Russel がつぎ、Russel の死後 Black の弟子で James Watt の友人 Robisson がつぐ。また、Ferguson の道徳哲学教授職の後任が、Dugald Stewart であり、第二次 *E. R.* を創刊し、初期において活潑に寄稿した人びとは、Stewart の学生ないしは、彼や Smith, さらに彼の同僚の John Playfair の強い影響を受けていた若者たちであった。第二次 *E. R.* 創刊当時の事情に関して、次のようなことが知られている。³⁾ 彼らのグループが、Francis Jeffery が住んでいた建物の一室で会合していたときその中のひとり Sydney Smith が *Review* の発行を提案し一同の賛成をえた、というものである。彼らの間で指導的立場にあったのは、当時29才の Jeffery であり、1829年まで編集を担当した。S. Smith は31才であったが、創刊に参加し、初期の各号の主たる執筆者でもあった Francis Horner は24才、Henry Browgham は23才であった。この点、Wedderburn が第一次 *E. R.* の創刊当時22才であったことを考えあわせて興味深いことといわねばならない。

このようにして発行が続けられていった第二次 *E. R.* は、創刊者たちの政治的立場が Whig のそれであり、その第1号の、文学史に一時代を画したとさえいわれる、青と黄色のカバーは Whig 党のいわばシンボル・カラーであった。しかし、創刊時には、事実上 Whig 党機関とは何の関係も

なく、関係した青年たちは、彼ら自身の独自の見解を述べていたという。そこで、英国で最初の、High-Clan Critical Journal (*Britanica*, 11版) となった。Whig との関係は、前述のように直接的なものではなかったが、Whig 的観点をさらに進めた立場から、Whig の指導者に対して既成秩序に対してよりきびしい態度をとるよう追求していたようである。そのために、一部の寄稿者(たとえば Sir Walter Sott) の離反を招いている。⁴⁾

次に、第二次 *E. R.* に対する従来の研究について述べる。海外(とくに英・米)においては、いわゆる書誌学的研究として、各 *Review* の筆者の確定の問題に多大の精力が注ぎこまれてきた。よく知られているように、*E. R.* の特色は、(第一次、第二次ともに)出版された書物に対する詳細な *Review* のみで構成され、しかもそのすべてが無署名であるという点にある。そして、その内容は、わが国のいわゆる「書評」とは大きく異なり、評論の形式をかりた独自の主張の展開、文字どおり歯に衣させぬ批判をともなう論争などをふくんでいる。*E. R.* が古典派経済学やロマン派文学運動の重要資料となりえているのはそのためであるし、また、科学史上有名な事例として、*Bakerian Lecture* に対する *E. R.* 誌上の痛烈きわまる批判が、Thomas Yongg をしばらく物理学研究から遠ざけたことなどが知られているわけである。したがって、執筆者を確定してする、ということの重要性は自明であり、*E. R.* 研究の最大のテーマになる。⁵⁾

すでによく知られている寄稿者には、すでに述べた創刊に関係した人びとのほか、Thomas Carlyle, William Hazitt, Sir Walter Scott, Thomas Macaulay といった文筆家、さらには、T. R. Malthus, James Mill, John Stewart Mill, John Playfair, J. R. McCulloch といった経済学者、社会思想家がふくまれている。その他、天文学者 John Hershel ほか、その重要性が明きらかな人びとが多い。

しかし、この種の研究をわが国でおこなうことは偶然の幸運に見まわれた場合以外は、まず不可能に近く、国外の研究の成果を利用するほかはない。

次に、19世紀英国研究の手段として、個別的に利用されることは、きわめてしばしばおこなわれている。経済学説史、植民地政策をもふくめた経済政策史、文学史、哲学史、科学史など、さまざまな立場から、*E. R.* におさめられた Review が利用されているのである。ただし、その場合、各 Review が、それぞれのテーマに対する重要資料として用いられることが大部分であり、Review の傾向を通じての、時代の動向の把握、といったタイプの研究はあまり見られない。

日本においては、第一次 *E. R.* に関する前述の水田教授の紹介のほかは、*E. R.* それ自体を扱ったものはほとんどなく、個々のテーマからの言及がなされている程度にすぎない。この状態は、各分野の研究における *E. R.* の重要性を考慮するならば、克服されるべきであろう。

以上の点からして、われわれの研究の意味は、ほとんど明きらかであると思われる。以下で、具体的な手順の説明を通じて、さらにその点を明きらかにしよう。

2. 研究の手順 (1)

ここでは、今後進めるべき、ルーチン・ワークとしての処理手順（一部は実施済み）を述べる。

E. R. が初等的な情報検索の対象として好適である理由は次のとおりである。

(1) 主題がひろく分散していること……情報検索（以下、IR と略称）の対象となるのは、通常、高度に専門化された特定の分野で新たに発生しつつある文献である。その場合、すでに専門化された分野の内部で、必要な分類や索引づくりをおこなわなければならない。したがって、たとえば、UDC のような体系的分類コードを利用する場合には、コードのある特定の部分だけを、しかも、高い桁数で用いなければならない。また、キイ・ワードを用いるにしても、なるべく多くを用い、しかも、リンクやロールを慎重に考慮して、いわゆるノイズの発生を防ぐことが必要になる。既存の IR でとくに苦勞するのは、おゝむねそのような点であることが多い。それに対して、*E. R.* のように主題が分散している場合には、体系的分類コードは、少ない桁数で万遍なく利用されうるし、キイ・ワードも少数ですむ。そして、両者を

たがいに補いあうように用いることができよう。

(2) 対象が書評であるので、図書に対する取扱いとのアナロジーが成立する。論文の場合のように、内容ないしは抄録にあたる必要はほとんどなく、標題を扱うだけで目的がほぼ達せられる。

(3) 項目の数が、1号で10ないし30であり、平均20として1802～1884では全体で4～5桁の範囲内であろうと思われる。この数は研究者自身による半手工業的取扱いで処理しうる限度であろう。これを越えると、専門のルーチン・ワークが必要になり、さらに増えると、機械に依存せざるをえない。われわれの場合、最終的には、機械による IR をめざしてはいるが、前段階の半手工業者的処理で充分実用的な結果が得られるはずである。

以上のような特徴は、実は、比較的小規模な図書館における蔵書を IR の初等的な手法で処理する場合とよく似たものである。その意味で、専門文献を対象とする場合とは別個に適用可能な分野が見出されるであろう。

次に具体的な手順として現在考えられ、一部実行に移されているものについて説明する。

(1) Contents Sheet の作成。……図書館に所蔵されている *E. R.* (1802—1884) の全目次のゼロックスコピーをとり、研究参加者各自が事前に概略をつかむために眼をとおす。

(2) ファイル・システムの準備……当面はパンチ・カードを用いる。これは通常のカードと異なり、複数の基準による分類が1種類のカードで実行でき、ソーティングによって所要のものをとり出すことが容易である。われわれの目的にとって最適なカードを事前に慎重に選定しなければならない。

(3) カードの作成……Contents Sheet のコピーをつくり、裁断してカードにはりつけ、文献カードを作成する。

(4) コードの決定……この段階がもっとも重要である。ほゞ以下のように決める。

(i) 書誌的事項……、発行年、号数、各号内における Review 番号、ページ数、対象である書物の著者名。さらに、これまでの研究で明きらかになった執筆者名をいれる場所を空けておく。

(人名は頭文字の2～3で示す)

(ii) 主題に関する事項……対象が図書、報告の

たぐいであるので、UDC とキイ・ワードを併用する。UDC 索引は、できれば2～3個を用い相互の関係を示すために、+、/、:、[]を用いる。キイ・ワードも2～3個用い、アルファベットの頭文字をとるが、リンクやロールは付さない。

(5) カードの完成……各カードに必要なコードを付してパンチする。人名、キイ・ワードのように、全文をコード化しえないものために、別に Index を準備する。このようにしておけば、さらに高度なファイル・システムに移行しようとするさいに便利であろう。

(6) 完成したカードを用いて、全体に対するいくつかの基礎的統計資料をつくる。そのことによって従来、個別的な内容に対する研究の中で述べられていたこと、あるいは、Contents Sheets の Survey によってえられた印象を確認し、次の段階への準備とする。たとえば、

(i) 各号に収められている Review の数や長さの経年変化……一見単純すぎる問題のように思われるが、R. E. の編集方針、性格の変化を見るためのひとつの要因である。たとえば、創刊当時は、一篇あたりのページ数が少く、そのかわりに各号に30本程度の Review がとりあげられているが、2～30年後には、号あたりの数が減少するのにたいし、50ページをこえる長大な Review が現われるようになる。このようなことが、F. Jeffery → M. Napier → W. Empson → Sir G. C. Lewis → H. Reeve → the Hon. A. Elliot とうけつがれてゆく Editor の方針と関係があるかどうか、また、1840年頃におこったとされる性格の変化（とくに経済問題について）、Kant 哲学やロマン派運動に対する姿勢の変化との間に相関があるかどうか、主題との関係があるかどうか、ということを見ておくことが必要である。

(ii) UDC の大分類を用いて、大まかな分野ごとの経年変化をしらべておく。上のことと関連して、たとえば、政治経済学的テーマ、神学的テーマ、哲学、ロマン派文学、などのとりあげられ方が、80年間にどのように移りかわったか、をしらべ、その結果を、この時期の思想史や文学史、あるいは政治史の流れとつきあわせて表につくる。とくに、大英帝国領となる諸地域に関する地域研

究に相当するものが、かなりの比重をしめるが、その動向を見ておくことが必要であると思われる。

以上の手順のうち、1975年度において着手され一部実行されると考えられるのは、(5)の段階までである。この段階まで進めば、本研究とは別に、E. R. を利用する研究者にとって、かなりの便宜を提供しうることになるであろう。また、その実行の過程で明きらかになった具体的な問題点をまとめておくことにしたい。それは、本報告の〔II〕に示されるであろうが、その結果は、簡易な I R を実行するさいに役立てられうると信ずるものである。

3. 研究の手順——(2)

ここでは、カード完成後に、それを利用しておこなわれるべき研究計画の概要を若干の予想をもふくめて示しておくことにする。

E. R. の内容を個別研究に利用するための便宜をはかる、という目的は一応別とし、われわれが Contents 全体の分析に求めようとしているテーマを考えておきたい。

まず第一に、経済学史、経済政策史に関する問題がある。創刊から1840年代までの E. R. は、Fetter によれば「その時代における、経済文献の『リーダーズ・ダイジェスト』であった。」その時代の重要な経済学者のほとんどが寄稿し、テーマも、A. Smith の古典の理論的解明から、ナポレオン戦争期のイギリスの経済政策、植民地政策にまで及ぶ。今日までの研究では、Ricardo は執筆者のリストには入っていない。しかし、初期の彼が E. R. に現われた Review を通して Smith の著作から強い知的刺激を受けたことは事実のようである。また、Ricardo の著作はしばしば E. R. にとりあげられ、とくに1817年の主著 *Principles of Political Economy and Taxation* は、直ちに McCulloch によって Review の対象とされ、学界における市民権の獲得と勝利が保証される上で、強力な支援が与えられることになった。また McCulloch は、産業革命期における工場と労働に関する著作や報告に対しても精力的に Review をおこなっている。

このような点は、いわゆる external history としてはかなりよく知られた事実であるが、E. R.

における Review の内容と当時の具体的な状況に
 たちいった歴史的検討をおこなう余地が残されて
 いるのである。

次に哲学の問題について述べよう。この時期に
 関係した重要なテーマとして、スコットランドの
 哲学の19世紀における継承と、ドイツ古典哲学の
 イギリスにおける受容との関連の問題がある。イ
 ギリス側から見ると、「常識哲学」とよびならわ
 されている Reid や Stewart の直接の影響下に出
 発した *E. R.* で、Kant 以下のドイツ古典哲学が
 どのように Review されていたか、その内容は、
 時代が下り執筆者が変るにつれて、(たとえば
 Sir William Hamilton の活躍した時代に) どのよ
 うに変化して行ったか、ということを追うること
 である。今日の一応の定説は、Reid や D. Ste-
 wart は、Kant をほとんど理解しなかったという
 ことであり、1803年の *E. R.* の Review (Thomas
 Brown による)が、その証拠とされていた。Kant
 の精力的な紹介は Coleridge によってなされたが、
 いわゆる ムード的受容であり、W. Hamilton の
 時代をまたなければならなかった、というのであ
 る。⁶⁾ 他方、ドイツ側から見ると、いわゆるヘー
 ゲル・マルクスの市民社会論が、古典派経済学と
 ともに、スコットランドの哲学をどのように吸収
 しているか、という課題がある。Lukács 以来の
 努力にもかかわらず、まだ明確でない点が多い。⁷⁾
 ロマン派文学運動との関連では、外国文学、と
 くは Goethe を中心とするロマン派運動の紹介が
 どのように Review されているか、Wordsworth
 らの作品に対する評価がどのように移っていくか、
 といった点に興味もたれる。Kant に対するの
 と同様、初期の Reviewer と中期のそれとの間に、
 明らかな態度の変化があることが従来指摘され
 ているが、内容的な検討がさらに必要とされるこ
 とは哲学の場合と同様である。ロマン派の運動の
 思想的な意味については、すでに知られている
 ことが多い。⁸⁾ とはいえ、さきにものべた Cole-
 ridge の Kant 紹介の意味、「自然哲学」との関連、
 化学者 Humphry Davy に対する影響など、最近
 になって注目されつつある問題に対する寄与が期
 待される。⁹⁾

自然科学史に関する領域では、経済学史の場合
 とくらべ、*E. R.* ははるかに利用されていない資

料である。1830年代には、Charles Babbage によ
 って、『イングランドにおける科学の衰退』が出さ
 れ、産業革命の現実と密着した新しい科学の展開
 とそのための組織の必要性を説く人びと、Camb-
 ridge 大学や王立学会の伝統をひく人びとの間で、
 論争がおこなわれるのであるが、前者は、18世紀
 における Black や Hutton にはじまるスコットラ
 ンドの科学研究(さらにいうならば Edinburgh
 の医学部と Leiden との結びつき)にさかのぼる
 ことができる。London Mechanic Institute の運
 営を委任された Birkbeck も、スコットランドに
 おける実績を買われたのであった。*E. R.* では、
 さきにもふれた Young の Bakerian Lecture から
 Davy の著作、さらには Lord Kelvin による
 “*The Treatise of Natural Philosophy*” にいた
 る、19世紀英国科学の重要な文献が Review の対
 象とされ、また、Quetelet の統計学研究が、John
 Hershel (彼は学生時代からの Babbage の盟友
 であった)によって扱われている。従来、それ
 らは、きわめて個別的にしか利用されて来なかつ
 たので、ここでひと通りの系統的な Survey をお
 こなうことさえ、一定の意味をもつ、というのが
 現状である。

このように、各分野によって研究の蓄積にかな
 りの差があるとはいえ、われわれがおこなおうと
 する初等的な IR の結果が、従来の学問的成果に
 対して何ものかをつけ加える可能性をもつことが
 理解されると思う。

4. おわりに

この報告は、序論でも述べたように、今後相当
 の期間にわたって続行される、大部分がルーチン
 ・ワークからなる作業の「まえおき」である。そ
 して、最終的な成果は、ひとそろいの「ファイル」
 として提供されることになるはずである。われわ
 れは、その成果が、それぞれ独立の問題意識をも
 った異なる諸分野の研究者によって利用されるこ
 と、および、この作業の手順が、研究者はもちろん、
 図書館や研究所における日常の業務に対して
 何らかの参考となりうることを望んでいる。この
 ことをもって一応のむすびにかえたい。

〔附録〕

現在試験的におこなわれつつあるコード化の実例を示しておく。作業の遂行，利用上の便宜などを考慮して，今後も手直しをおこなう予定である。ご批判をいただければ幸である。

(例 1)

On Paper Credit of Great Britain

A ; 1802 ; 1 ; 25 ; 29 ; Tho ; Hor

B ; 336. 34 [410] ; Cred., Brit.

- a) 発行年 b) 号数 c) Review No. d) ページ数
e) 著者 f) 筆者 (この場合は確認されている，未確認の場合は空白)
g) 公的クレジットを表わす UDC コード
h) 英国の UDC コード [] は副次的関係を示す。
i) キイ・ワード

(例 2)

On the Oblique Reflection of Iceland Crystal

A ; 1802 ; 3 ; 9 ; 1 ; Wool ;

B ; 535. 51^{a)} ; 549. 52^{b)} ; Pol. Light^{c)} , Cryst

- a) 複屈折の UDC コード
b) 一軸結晶のコード . : は共に重要な概念であることを示す。
c) 結晶による複屈折現象から偏光の存在を見出す研究であることを示すキイ・ワード。

(例 3)

On the Hindoo Systems of Astronomy
and their Connection with History of Ancient
and Modern Times.

A ; 1807 ; 20 ; 12 ; 17 ; Bent ;

B : 521 : 34 + 954^{a)} ; Ind, Astr^{b)} , Hist.

- a) 古代インドの UDC コード
b) インド一般史のコード，+は並列的關係。

(例 1) は，比較的 naturally に内容の字句そのままにコード化する。筆者も確認されている。

(例 2) は，内容は偏光の存在を示す，結晶によ

る複屈折現象をさすので，コード，キイ・ワードともに内容に即してつくらねばならない場合できわめて厄介である。

(例 3) は，コードやキイ・ワードが増加せざるをえない場合を示す。

その他，種々の複雑な場合があるが，パンチ・カードの capacity を考慮しつつ実行した上で，問題点を次回に報告したい。

参 考 文 献

- 1) 名古屋大学経済学部附属 経済構造分析 資料センター「調査と資料」No. 55 (1975, 3)
- 2) J. G. Crowther: *Scientists of the Industrial Revolution* (1962).
- 3) J. McCosh: *The Scottish Philosophy* (1875).
- 4) F. W. Fetter: *The Authorship of Economic Articles in the Edinburgh Review 1802-47, the Journal of Political Economy*. LXI. (1953).
- 5) Fetter: *ibid.*
- 6) W. R. Sorley: *A History of British Philosophy to 1900* (1920).
S. A. Grave: *The Scottish Philosophy of Common Sense* (1960).
- 7) G. Lukács; *der Junge Hegel* (1948).
H. S. Harris: *Hegel's Development* (1972).
後者によると，Ferguson の *Moral Philosophy* のドイツ語訳がたしかに Hegel によって学習されているようである。
- 8) A. O. Lovejoy: *The Meaning of Romanticism for the Historian of Ideas*, JHI. 2. (1941)
- 9) Giere and Westfall(ed.): *Foundation of Scientific Method, The 19th Century* (1973). 所収の諸論文，とくに，L. P. Williams: *Kant, Naturphilosophie and Scientific Method.*